

カササギ 英:Black-billed Magpie 学:*Pica pica*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 カラス科

全長: 445mm(400-480) 自然翼長: 186-221mm
尾長: 197-264mm 嘴峰長: 29-39mm
ふくろ長: 47-55mm 体重: 190-287g

※全長は榎本(1941), その他は清棲(1980)による。

羽色:

雌雄同色。初列風切と肩から腹にかけて純白色。その部分を除き、全身、金属光沢のある黒色ないし藍紫色の美しいツートンカラー。嘴、脚、虹彩は黒。



写真1. カササギ。

鳴き声:

鋭い声で「カチ、カチ」または、「カシャ、カシャ、カシャ」と鳴く。佐賀地方ではカササギを「カチガラス」と呼ぶ。諸説あるが、鳴き声に由来するとも言われている。

2. 分布と生息環境

分布:

インド亜大陸とシベリアの永久凍土帯を除くユーラシア大陸、北アフリカの一部、アラビア半島の一部、北米大陸にかけての北半球に広く分布している。Vaurie による分類では本種は13亜種に分けられ、日本には*P. p. sericea* が分布する(Goodwin 1977)。国内では、北部九州に留鳥として周年分布する。

本種は朝鮮半島から人為的に移入されたという言い伝えがある。江口・久保(1992)は佐賀県、福岡県の史料を調べ、本種が江戸時代開始前後に朝鮮半島より移入されたと結論している。1923年には、「海外から移殖されて現在野生状態にある著名なもの」という理由で、福岡県南部と佐賀県南部がカササギ生息地として天然記念物に指定された。しかし、現在の理解では外来種であり、むしろ駆除の対象となる。この点は、保護上の問題を提起しているともいえる。指定当時、本種の分布は佐賀県南部、福岡県南部に限られていたが、1970年代より分布が拡大し、1990年代には福岡県、佐賀県、長崎県の玄界灘沿岸、熊本県北部の有明海沿岸、大分県西部の日田市近辺まで広がった。これらの分布地以外にも、島根、新潟、長野、秋田、北海道で、迷行ないし人為的移入と思われる個体の目撃や定着が報告されている(日本鳥学会2000)。

生息環境:

農耕地が主で、住宅地、市街地にも生息しているが、森林内には生息しない。近年の分布拡大は、障壁となっていた丘陵部の森林が、宅地開発、果樹園開発などにより取り払われ、新しい生息地の出現があったためと考えられる。

3. 生活史

繁殖システム: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
繁殖期 非繁殖期

つがい関係は終生で、一夫一妻的に繁殖する。

4 つがい単位で1~4ヘクタール程度のなわばりを防

衛する。主に防衛されるのは集落内に作られる巣の近辺で、採餌はなわばり外の共同採餌場でもおこなう。なわばり行動はヒナの巣立ち後は低下して、10月頃から再び活発になる。若鳥は5~6月頃には親の養育を離れて群れを作り、翌春まで群れ単位で生活し、夜は出自集落近辺の竹藪などに集団でねぐらを営む。群れは春までには次第に小さくなり、群れを離れた若鳥は出自集落の周辺近くになわばりを獲得し、早いものでは1歳で、通常は2歳で繁殖を始める(久保1975)。社会形態は亜種間で大きく異なり、ヨーロッパの基亜種は厳格ななわばりを防衛するが、北米産亜種はルースコロニー的で(Birkhead 1991)、日本のカササギは中間的である。

巣:

村落、市街地の高木に枯れ枝や小枝で球状の巣を作る。営巣樹種はエノキ、カキノキ、クスノキ、イチョウ、ヤナギなどが多い。最近では樹木よりも電柱に営巣する傾向が強い。巣の大きさは、長径45~150cm、短径38~115cm、高さ30~



写真2. センダンにかけられたカササギの巣。

125cmである(n=420)。巣の外側は木の枝で作られるが、内部の底には田やクレークの土を塗り固め、その上に草の繊維、木の葉、布きれ、綿などを敷いて産座としている。巣の斜め上方に直径10cmほどの入り口がある。最近ではハンガーや金網の針金が多数用いられる巣もある。ヨーロッパでは2割ほどの巣は屋根を欠いている(Birkhead 1991)。このような巣はカラス類の捕食を受けやすい。造巣は雌雄で行い、早いものでは12月下旬頃に開始する。1ヶ月ほどで完成させるが、再営巣の場合は1週間ほどでできる。

産卵・育雛:

早いものでは2月に始まるが、ほとんどは3~4月に産卵される。卵サイズは35.0×23.7mm(n=21)、卵重は約10gで、薄い緑色の地に茶褐色の斑点が入っている。平均産卵数は6.2個で、7個がもっとも頻度が高い。産卵数は季節の進行とともに減少する。繁殖は年1回で、失敗するとやり直し繁殖を行う。やり直し産卵数は小さくなる。5卵目産卵後に抱卵に入り、抱卵期間は最終卵産卵後18日ほどである。夜は主に雌が、昼間は雌雄交代で抱卵する。4~5羽は同時にふ化し、残りの2~4羽は遅れてふ化する。巣立ちまでの育雛期間はふ化後30日ほどである。



写真3. カササギの卵。

繁殖成功率:

佐賀市北部の個体群では、繁殖成功率は低く、巣立ちに成功した巣の割合は完成巣中11%だった(Eguchi 1995)。失敗原因の80%以上が捕食で、カラス(ハシブトガラス、ハシボンガラス)、アオダイショウ、ノネコが主な捕食者で、特にカラス類の捕食が多い。しかし、佐賀市南部では60%程度の巣が巣立ちに成功したという(1970年代の調査)。山麓に近い佐賀市北部は南部に比べハシブトガラスの密度が高かったことが原因として考えられる。

4. 食性と採食行動

雑食性。昆虫、ミミズ、魚類、カエル類、小哺乳類、鳥類、草の種子、穀物、果実類を食べる。ゴミ捨て場などを漁り、残飯なども食べる。大小のゴミ捨て場、養鶏場、畜舎などに大きな群れが集まる。畦や樹木の洞や樹皮の隙間などに、小鳥、魚、カメの子、残飯など比較的大きな餌を隠すことがある。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 巣のサイズはつがいの質を示す信号？

大きな巣を作ることができるのは、カササギのつがいの質が高いか、またはなわばりの質が高い場合だと考えられる。実験的に巣を小さくすると、産卵数は少なくなり、メスの抱卵開始が早まり、非同時ふ化の程度が高まり、ヒナ間の体重差が大きくなった。巣の大きさはオスのつがい形成後の投資量の指標だと考えられる。メスはこの情報をもとに産卵数を調整し、オスの投資が期待できない巣では、小さいヒナの死亡によるヒナ数調節が生じるように非同時ふ化を現出させたと解釈される(Soler *et al.* 2001)。De Neve & Soler (2002)は、人為的にカササギのやり直し営巣を引き起こし、やり直し巣の産卵数は巣の大きさではなく、やり直し造巣に要した時間に影響(負の相関)されることを示した。このように、メスはオスの造巣能力を評価して、能力の高いオスとつがった場合は産卵数が増えると報告されている。しかし、カササギは終生同一つがいを維持する傾向があるので、メスは繁殖の度にオスの能力を評価する必要はないのではとも考えられる。

● カササギの電柱営巣と保護の問題

佐賀県森林保全課の県内一斉調査によると、1970年代半ばからの10年間で営巣数は3倍に増加した。また、70年代には少なかった電柱営巣数は1984年度の調査では樹木営巣数を上回り、その後も増加している。電柱は樹木に比べて巣材の安定がよく造巣が容易なので、樹木が多い

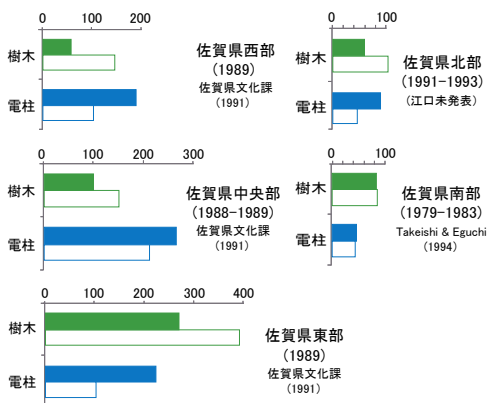


図1. カササギは樹木より電柱を好む。営巣数の観察値(塗りつぶし)と、調査地内の樹木と電柱の本数をもとにした営巣数の期待値(白抜き)。佐賀県南部を除き、すべて観察値と期待値に有意差がみられた。(χ²検定 P<0.01)

地域でも好んで電柱に営巣する傾向が見られる(図1)。福岡県でも同様で、カササギの密度や生息環境にかかわらず、電柱への営巣割合は70%を超えている(福岡県教育委員会による1997年度調査)。また、電

柱に作られた巣では樹木に作られた巣よりも巣立ちに成功する巣の割合が高い(図2)。カササギにとっては好適な営巣場所が出現したことになる。しかし、カササギの電柱営巣は漏電事故の一因ともなっている。技術改良により、事故件数は年々減少しているが、電柱の1本1本に漏電防止措置を施すには多くの費用がかかる

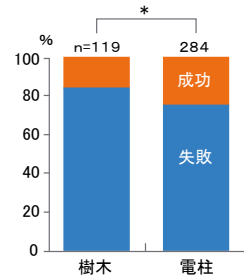


図2. 電柱と樹木にかけられた巣の繁殖成功。(Eguchi & Takeishi 1997より)*P<0.05, χ²検定.

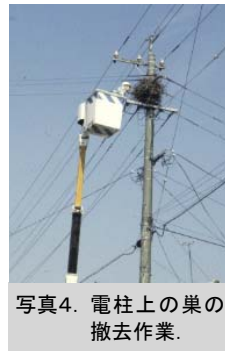


写真4. 電柱上の巣の撤去作業。

ため、カササギの分布拡大に追いつけない。そのため、電力会社は毎年カササギの電柱巣の撤去を行っている(写真4)。このように、電柱利用はカササギの分布拡大、個体数増加をもたらす一方で、人間との軋轢を高めており、保護上の問題となりつつある。

6. 引用・参考文献

Birkhead, TR. 1991. The Magpies. T & A. D. Poyser, London.
 De Neve, L & Soler, JJ. 2002. Nest-building activity and laying date influence female reproductive investment in magpies: an experimental study. Anim. Behav. 63: 975-980.
 Eguchi, K. 1995. Seasonal change in breeding success of the Black-billed Magpie *Pica pica sericea*. Jpn. J. Ornithol. 44: 73-80.
 Eguchi, K. & Takeishi, M. 1997. The ecology of the Black-billed Magpie in Japan. Acta Ornithologica 31: 33-37.
 江口和洋・久保浩洋. 1992. 日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来一史料調査による. 山階鳥研報24: 32-39.
 榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部.
 Goodwin, D. 1977. Crows of the World. Univ. of Queensland Press, St. Lucia.
 清棲幸保. 1980. 日本鳥類大図鑑1(増補改訂版). 講談社, 東京.
 久保浩洋. 1975. クリークのある水田に棲む隣人ーカササギ. アニマ3(2): 5-23.
 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録(第6版). 土倉事務所, 京都.
 Soler, JJ., De Neve, L., Martinez, JG. & Soler, M. 2001. Nest size affects clutch size and the start of incubation in magpies: an experimental study. Behav. Ecol., 12: 301-307.

執筆者

江口和洋 九州大学大学院理学研究院生物科学部門

シジウカラの巣箱を担いで山の中を歩くのがつらくなりカワガラスの研究に移り、渓谷を歩き回るのがきつくなりカササギへと移り、木登りがこわくなりマダガスカルの鳥に移り、テント生活がつらくなりソウシチョウに移り、ヤブこぎがきついで一番楽なオーストラリアの鳥を研究するようになりました。

